



作/小津 誠 (部分)

# 一流の芸術に触れ、同じ空間で感動共有

全国障害者芸術・文化祭とはパラリンピックの文化祭版。障害者の芸術及び文化活動への参加を通じて、障害者の生活を豊かにするとともに、国民の障害への理解と認識を深め、障害者の自立と社会参加の促進に寄与することを目的に開催されており、今年で12回目となる。さが大会では、これまで福祉分野など関係者中心のイベントになりがちだったことを踏まえ、関係者以外の一般の人たちを多く巻き込むようなプログラムが考えられている。障害の有無を超えて、誰もがともに芸術・文化を楽しむ感動できる大会を目指している。

## 一流の表現者が勢揃い

つまり、まずはアート、音楽、舞台芸術、スポーツの各分野一流の表現者、プレーヤーの力で、観客の心を揺り動かす。最終的にその感動を同じ空間で共有することにより、障害者の社会参加の意欲と、社会の障害者への理解を促進させようということ。

予定されているイベントはかなり豪華だ。音楽ではクラシックファン垂涎のソリスト2人が登場する。視覚障害を持つヴァイオリニスト・川島成道さんと、左手のピアニスト・館野泉さんが出演。また長崎県を拠点に活動する、知的障害者のプロ和太鼓集団・瑞宝太鼓メンバーによる演奏もある。

アートでは大河ドラマ「平清盛」の題字を手掛けた金澤翔子さんによる書道パフォーマンスに注目。母である泰子さんの講演も大人気だ。佐賀出身のポップアーティスト・326さんが下書きした巨大な線画に、来場者みんなで色を塗る企画も楽しそうだ。

## パラ五輪「金」と一緒に

先日、閉幕したロンドン・パラリンピックの感動が佐賀に。ゴールボールで金メダルを獲得したメンバーが所属する福岡の障がい者スポーツ選手雇用センター「シーズアスリート」のメンバーが来場。一緒に競技を体験することができる。また電動車椅子サッカー「佐賀サムライFC」との競技体



2012年  
11/23 祝金  
11/25 日

# って何？

芸術も、文化も、楽しんだもん勝ち！ 11月23日から3日間、佐賀市文化会館と佐賀県総合体育館で開催される第12回全国障害者芸術・文化祭さが大会「パラエティ・アート・フェスタさが2012」。障害のある人もない人も楽しめる、文化・芸術が一堂に集結。瑞々しい表現に富んだアートの祭典だ。

# ポップアーティスト

# 326



# 会場一体 巨大塗り絵にチャレンジ

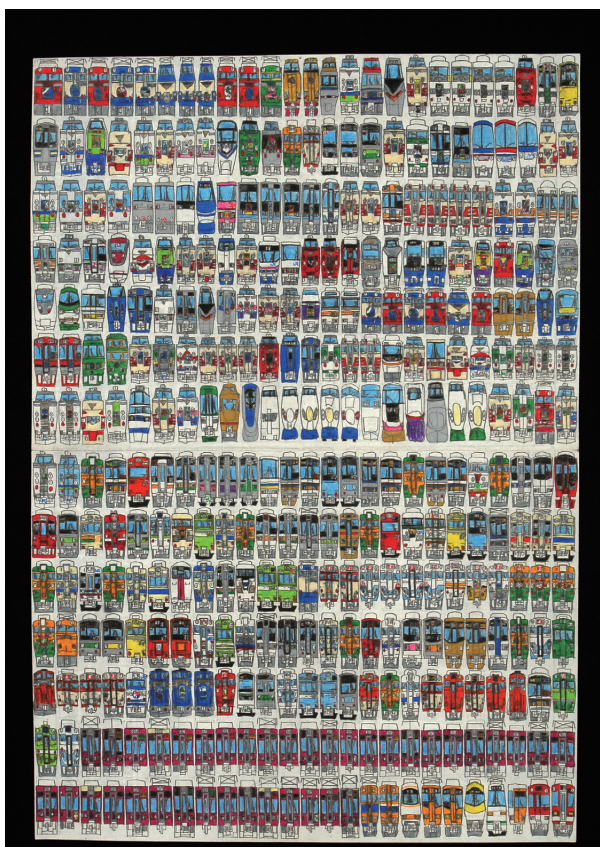
「障害を持った人もそうで無い人も、年齢も関係なく自由に色を重ねてくれたら嬉しいですね」。佐賀市出身のポップアーティスト・326さんはバラフェス会場で巨大な塗り絵の共同制作に挑戦する。線画は326さんが担当。横約5メートル×縦約2メートルの画面を手ごろなサイズに分け、来場者に色を塗ってもらう計画だ。「みんなで力を合わせて、どういう作品になるのか。その化学反応に期待しています。空いたスペースに勝手に描いてくれたりしたら嬉しいですね」。

東日本大震災後、326さんは塗り絵用の線画を提供。佐賀県の園児が色を塗り、被災地の避難所などに送られた。「セオリーなんか完全に無視した色づかい。自分の描いた絵に

ろんな人が関わることによって100点以上になる。人の力を借りて、一人で行けないところへ到達する。そういう素敵な方程式を実感しました」。その後も、自身のブログで塗り絵用の線画を公開している。

**ファンの写真に言葉を**

自己完結せず共同作業を通して想像以上の表現に辿り着く。9月に出版したデビュー15周年を記念する最新刊「明日にはまだ失敗がない それだけで生きる価値がある」にも同じ思いが込められている。同書には326さんのイラストはほとんど掲載されていない。326さんやその家族が撮影した写真や、ファンから送られたもの、ひと文字ひと文字書いた言葉が重ねられている。選ばれた写真は、子どもや街の風景など、ごくありふれた日常が中心。こう撮りたい、ではなく、こ



作/本岡秀則



作/澤田真一



作/小津 誠

験企画にはサガン鳥栖も参加する。日頃馴染みのない競技を通して障害者選手の手すごさを体感しよう。

自由な色使い、型に囚われない造形。障害を超えて見る人を虜にしそうなのが、同時開催の「アール・ブリュット展」だ。「アール・ブリュット」とはフランス語で「生の芸術」という意味。正規の美術教育を受けていない人が自発的に生み出した、既存のモードに影響を受けていない絵画や造形作品のことを指す。2010-11年にはパリで日本の「アール・ブリュット」を集めた展覧会が開催され、約12万人を動員した大きな反響を生んだ。

## 表現の可能性に出会う

今回は佐賀県や九州を始めとする31

人の作品を展示する。企画を担当する特定非営利活動法人はれたりくもったりのアートディレクター小林瑞恵さんは「アール・ブリュット」について、「第一線のアーティストにもひけをとらない力強く幅の広い表現が魅力です。人間の可能性の源泉を感じることができ、興味を抱くことで、その背後にある物語や人の表現の可能性を感じていただきたい」と語る。美しさだけがアートの価値ではない。それまでの人生で経験したことのない圧倒的な出会いこそがアートの醍醐味ではないだろうか。「アール・ブリュット」の作家の中には展示許可の意志表示も難しい人もいる。たぐさんの人に、この個人的で力強い作品群に触れてもらうために

は、周囲のサポートと、社会の協力が必要だ。まずは今回の展覧会で実際に体験してほしい。

バラフェスでは、アートと社会の新しい関係をつくる「エイブル・アート・ムーブメント(可能性の芸術運動)」を提唱する財団法人たんぼの家(奈良)の播磨靖夫さんの講演会がある。またアート・マネジメントセミナーも開催される。デザインによって、障害者のものづくりに商品力を付ける取り組みも増えてきた。佐賀のデザイン関係者、福祉関係者はぜひ参加してほしい。ミスター感覚で楽しんで、帰るときには障害者を取りまく、いろんな問題を理解する。バラフェスは障害を超えて一緒に生活する社会を作るための第一歩だ。



特定非営利活動法人はれたりくもったりアートディレクター

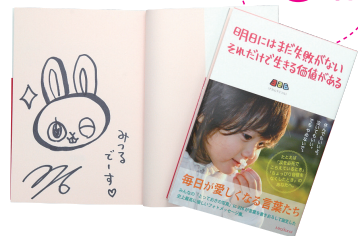
小林瑞恵さん

使わなくなったクレヨンなどのお絵描き道具を送ってください!!

送り先: 佐賀県文化課  
(〒840-8570 佐賀市城内1丁目1-59)  
電話: 0952 (25) 7236  
締切: 2012年11月15日まで

## 応募プレゼント

326さんサイン入り著書  
「明日にはまだ失敗がない  
それだけで生きる  
価値がある」  
3名



住所/氏名/連絡先をご明記の上、下記のあて先までハガキまたはメールでご応募ください。編集部での引き渡しとなります。

〒840-0826  
佐賀市白山2丁目7-1 エスプラッツ3階  
「MOTEMOTE さがプレゼント係」まで  
メール/info@motemote-saga.jp

◆応募締切◆ 10月10日(水) 消印有効

プロフィール/ナカムラ・ミツル 1978年生まれ佐賀市出身。幼稚園の頃からイラストを描きはじめ、高校卒業後、福岡のデザイン専門学校に通いながらインディーズで「326」として活動開始。1998年初冬、拠点を東京に移す。井上陽水の「TEENAGER」(フォーライフ)のジャケットイラストを担当。同年夏には東京・原宿ラフォーレミュージアムで個展を開催。ネオフォーク・コラボレーション「19(ジューク)」の作詞&ヴィジュアル・プロデュースを担当した。2000年3月には初の絵本「やさしいあくま」を発売。同年春よりNHK「新・真夜中の王国」でキャスターを務めるなど、あらゆるジャンルで活躍している。

## 左手のピアニスト 舘野 泉さん



を付けていたんですが、それを他の患者が珍し  
がったり。

「コンサートも、あと1曲というところで急に右手が遅れ出したんです。なんとか演奏を終わらせてお辞儀を済ませ、舞台袖に向かった。4、5歩歩いたところで倒れてしまって……」  
2002年1月、フィンランド第二の都市ターヴェレでのリサイタル。北欧や日本を中心に活躍していた世界的ピアニストの舘野泉さんは突然、脳溢血に襲われた。会場にいた医師が舞台に駆け上がり処置。救急車によって病院へ搬送された。

「コンサートも、あと1曲というところで急に右手が遅れ出したんです。なんとか演奏を終わらせてお辞儀を済ませ、舞台袖に向かった。4、5歩歩いたところで倒れてしまって……」  
2002年1月、フィンランド第二の都市ターヴェレでのリサイタル。北欧や日本を中心に活躍していた世界的ピアニストの舘野泉さんは突然、脳溢血に襲われた。会場にいた医師が舞台に駆け上がり処置。救急車によって病院へ搬送された。

### しゃべることもできない

タンペレの大病院に5日間入院した後、自宅のあるヘルシンキの病院へ転院した。出血した後は頭部のメスを入れられない部位。「医者からは手術は出来ないで自然に治るのを待つしかない、と言われました」。重病病棟での治療。最初は体も動かさないし、しゃべることも出来なかったという。2カ月経ちリハビリ病棟へ移る。「手で細かい作業をしたり、足を使った訓練や、記憶を元に戻すリハビリを積みました。次第に立つて用を足すことができるようになったり、話すできるようになりました。季節は冬。外は零下20度の寒さでしたが、スキーを履いてのリハビリもあつた。院内では転倒防止のために階段の上り下りを繰り返した。過酷な毎日のような舘野さんは楽しかったと振り返る。「病院にいたのは初めての体験なので新鮮でした。メンタルのリハビリも話したり、書いたり、記憶をたどったり面白かったですね。雑記帳に右手で日記

右手が動かないと知った音楽仲間が慰め顔で言ってくる。こちらも腹が立って死んでもやるものか、と思いました。左手だけでやっていけるだけの作品の量もなかったですし、復帰するなら両手で、という思いも強かった。

### 音楽を”食べたい“

03年4月、アメリカに留学していた息子さんがお土産に持ってきた楽譜が舘野さんの心を動かす。ブリッジの左手のための作品「三つのインプロヴィゼーション」だ。第一次世界大戦で右手が使えなくなった友人のために書いた作品だ。「あつ、これをやればいいんだ」と譜面を見て数秒で思いました。一年半くらい何もすることがなかった時間があつたから、気持ちを変化したのかもしれない。音楽を「食べたい」と思いました。両手でも左手でも指3本でもやっていたことは音楽。使える手でやればいい、はつと気づきました。そこからの行動は早かった。すぐに作曲家・

## 体が動く限り演奏それが音楽家

開宮芳生さんに連絡をとる。「1年後に、東京福岡、大阪、札幌の4都市でカムバックコンサートを開催したいので、左手の曲を書いてほしい」とフックスしました。その2日後には開宮さんから、喜んで、という返事を頂きました。「25分にも及ぶ大作を中心に04年、左手のピアニスト」として国内4都市を回った。

左手だけの演奏。最初は自分の手で音楽が奏でられるという喜びで一杯だった舘野さんだが、次第にその奥深い世界に引き込まれていく。「両手の場合は、片方が休むことができたりしますが、左手だと動きっぱなしで、鍵盤の端から端まで一本でカバーしなくてはなりません。2年くらい演奏していたら、その難しさに気づきました。スムーズに移動するためには体をひねったり、新しい演奏法を工夫する。すると作曲家がどんどん難しいものを面白がって作ってくれるようになりました。今年、今年の大河ドラマ「平清盛 テーマ曲やエンディング音楽「夢詠み：紀行」のソリストをつとめるなど、高い評価を受けている。「障害を持つ音楽は変わったのか、とよく聞かれますが、変化は変わりません。手を通じて音を奏でるのは同じですから、それを毎日続けて行く。まるで仏師・円空さんのような心持ちです」。円空とは全国を旅しながら生涯数万体の仏を掘った仏師。野性味に溢れた簡素なデザインに不思議な微笑みをたたえる表情は、舘野さんのシンブルなのに豊かな音色と同じ感情を観客に呼び起こす。「右手が使えなくなると、不自由になつたでしょ、両手が悲しいのでは、と言われますが全くそんなことを考えたことはありません。だって左手でできちゃうんだもん」。

佐賀は舘野さんの最初のピアノの先生・豊増昇さんの出身地。東京芸術大学在学中に九州で初めて演奏したのも佐賀。県出身の音楽家・栗林義信さんに誘われたからだった。「佐賀は縁の深い場所です。76歳にもなつて、そんなに無理をしなくても、とよく言われます。のんびりしたらそれで終わり。演奏家の仕事は体が動く限り、気持ちが続く限り続ける。それが定めです。どこでも音楽が出来るなら演奏するのが当たり前です」。

## ヴァイオリニスト 川島成道さん



## 眼が悪い事を含めて自分の音楽です

世界的に活躍するヴァイオリニスト川島成道さんは8歳のときに、祖父母と一緒に旅行していたアメリカで急病にかかる。医師が処方した薬が原因で重症に。奇跡的に回復したものの、視力に後遺症が残ってしまった。それまで友人と日が暮れるまで野山を駆け回っていた活発な少年だった川島さんは「これまで出来ることが出来なくなりました。多分は落ち込みましたが、自分以上に両親、祖父母が責任を感じてしまったみたいで」と当時を振り返る。

### 楽譜をマジックで大書

週数回の病院通いが続くなど生活が落ち着くのに時間がかかったが、少しずつ将来のことを考える余裕が出て来た。川島さんのお父さんはヴァイオリニスト、指導者をしてきた。その道の厳しさゆえか、3人の子息の誰にも幼年期はヴァイオリンを持たせることはしなかった。しかし両親は川島さんの未来を考えヴァイオリンを選択す

## 眼が悪い事を含めて自分の音楽です

それはあのアクションから2年後、10歳の時のことだった。プロ演奏家を目指すにはあまりにも遅いスタートだった。「生活の中心をヴァイオリンに置き、学校が終わったら自宅の練習室へ行き、食事と就寝以外は音楽漬けの毎日でした。楽器の持ち方など基礎的なところから教えてもらいました。ヴァイオリンは音を出すまでに時間がかかる楽器なのですが、最初から自然に構えることが出来て音が出ました。父の指導を見ていた経験からでしょう。両親は楽譜を油性ペンで大きく書いてくれたり協力してくれました。当時は今よりも視力がありませんでした」。

学校での先生や同級生も川島さんに対して普段通りに接した。「眼が悪いことを分かっているけど、特別に感じることもなく付き合ってくれました。視力低下をあまり意識することなく学校生活を過ごすことができました。先生も、出来ない事があるのは当然、その代わりに出来ることをするように、と言ってくれました。当番の仕事などきちんとこなしました」。

その後、桐朋学園高校、桐朋学園大学を経て、ロンドンの英国王立音楽院の大学院へ進学、首席で卒業する。1998年にはサントリーホールで日本デビュー。小林研一郎さん指揮による日本フィルとの共演だった。「プロとしてやっていくと感じたのはあのコンサートからです。それから一つひとつの公演を大事にしながら、一年一年頑張つて、それが5年になり10年になりました」。

### 耳を頼りに試行錯誤

演奏する予定の曲は、まず他のヴァイオリニストに弾いてもらって覚える。その後、耳を頼りに試行錯誤しながら自分の音に練り上げていく。「楽譜が読めない

いので、逆に曲を覚える力が付いたといえるかもしれません。楽譜に囚われることなく想像を羽ばたかせることができているんじゃないでしょうか。確かに不自由なこともありますが、この楽器を始めるときから眼が悪かったので、良かったらどうかと分かりません。ハンディではなく、それを含めて自分の音楽だと捉えています」と川島さんは微笑む。

「演奏家の表現はそれぞれ異なり、同じ音ということはありません。クラシック音楽は基本的に100〜200年前の、限られたレパートリーの曲を演奏します。だからこそ、その中に現れてくる存在の違いが浮き彫りになります。大事なことは自分にしか出来ない音を作っていくこと。それが一人ひとりに伝わっていくって、川島の音に心を動かしてもらえれば嬉しいですね」。

一人の演奏家として、障害を持つことが一人歩きすることは不本意だが、不自然に隠す必要はないと考える。「自分の中で障害をどう捉えて関わっていくかが大事だと思います。今となっては眼が悪くなつたからこそヴァイオリンを始めたと言えるでしょう。始めの頃は良かったと素直に思えない時期もありましたが、今はこれも自分に与えられた運命だと感じています」。

川島さんは11月24日、「バラエティ・アクト・フェスタ」が2012でコンサートを開く。「楽器で自分の思いを伝えることは難しい。一方で聴き手が自由に想像を働かせて、それぞれの受け取り方を感じてもらえる自由度があれば、500人500通りの感じ方ができる。それぞれの境遇も関わってくるでしょう。幸せなときに聴くのも良いですが、つらいときにはそれ以上の力を与えることが出来るのではないのでしょうか。音楽の持つ力を一人でも多くの人へ伝えていきたいです。川島さんのメッセージだ。

プロフィール／かわばた・なりみち 1971年、東京生まれ。視覚障害を負った幼少期にヴァイオリンと出会い、音楽の勉強を始める。桐朋学園大学卒業後、英国王立音楽院へ留学。1997年、同院を同院史上2人目となるスペシャル・アーティスト・ステイタスの称号を授与され首席卒業。1998年、東京サントリーホールにおいてデビュー。その後、英国と日本を拠点にソリストとして精力的な活動を展開し、毎年数多くのリサイタルとオーケストラとの共演を行っている。

プロフィール／たの・いずみ 1936年東京生まれ。60年東京芸術大学首席卒業。64年よりヘルシンキ在住。68年、メシアンコンクール第2位。同年より、フィンランド国立音楽院シベリウス・アカデミーの教授を務める。81年よりフィンランド政府の終身芸術家給与を得て、90年以降は演奏活動に専念。96年日本と諸外国との友好親善への貢献に対し、外務大臣表彰受賞。06年「シベリウス・メダル」授与。同年左手の作品の充実を図るため「舘野泉左手の文庫（募金）」を設立。演奏会は世界各地で3500回以上、リリースされたCDは130枚にのぼる。08年長年の音楽活動の顕著な功績に対し、旭日小綬章受章および文化庁長官表彰受賞。2012年5月から左手ピアノ音楽の集大成「舘野泉フェスティバル〜左手の音楽祭」と称し2年間で全16回の大プロジェクトを始動する。南相馬市民文化会館（福島県）名誉館長、日本シベリウス協会会長、日本セヴラック協会顧問、サン・フェリクス＝ロウラグ（ラングドック）名誉市民。